

武内宿禰とは、浦島太郎で、武内宿禰が向かった竜宮城は日田だった……

武内宿禰(たけうちのすくね)は、記紀に伝わる古代日本の人物。

『日本書紀』では「武内宿禰」、『古事記』では「建内宿禰」、他文献では「建内足尼」とも表記される場合があります。「宿禰」は尊称で、名称は「勇猛な、内廷の宿禰」の意とされる。

景行・成務・仲哀・応神・仁徳の5代(第12代から第16代)の各天皇に仕えたという伝説上の忠臣で、紀氏・巨勢氏・平群氏・葛城氏・蘇我氏など中央有力豪族の祖ともされる。

謎めいた人物で、300年間生き続けたとされる。ちなみに浦島太郎も300年間生き続けているので同一視される事があります。

浦島太郎は、『日本書紀』に登場される人物で「浦嶋子」の物語が原話とされています。その物語は、「浦嶋子が一人舟で釣りをしていると五色の亀が釣れ、亀が美女に変身した。その美女が蓬莱山(常世=不老不死の理想郷=龍宮城)へ浦嶋子をいざなっている」。

龍宮城と蓬莱山の違いがありますが、内容は酷似している。

北部九州での武内宿禰は、武雄神社や久留米の高良大社の主祭神とされ、日田の玉垂神社の主祭神も「武内宿禰」です。「玉垂」とは、高良大社の主祭神で「高良玉垂命」の事を意味しています。

また一説では、筑紫とは竹始の意味で、武=竹で、筑紫は、武内宿禰からの地名になっているという話もあります。

武内宿禰を読み解くと、詳細は割愛しますが、武内宿禰は、丹後半島から舞い降りた可能性が強く、天の日矛や都怒我阿羅斯等や素戔鳴尊や猿田彦にも通じ、景行天皇との関係もみられ、伊勢神宮の本当の祭神かという説まであります。

この様に、武内宿禰は、古代史の謎を解く重要な人物です。もう一人重要な人物が「神功皇后」です。住吉大社(大阪)では、応神天皇の父が武内宿禰と言われている、応神天皇の父は、本来仲哀天皇なのに、武内宿禰という奇妙な伝承があります。

この話を例えると、日田には神功皇后と思われる久津媛伝承があり、そして景行天皇が訪れることを『豊後国風土記』は伝えている。

この景行天皇が武内宿禰としたらと考えるとつながってきます。その秘密は五馬媛なのです。景行天皇と五馬媛を祭神する「玉来神社」の「玉来」は、玉とは、高良大社の高良玉垂の意味で、玉垂が来たという意味での神社ではないかと思う。玉垂が、武内宿禰と言われているので謎が解けたような気がします。